
何と言う。何を言う。

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何と言つ。何を言ひ。

【著者名】

N1617Z

【作者略】

じほんライス

【あらすじ】

2000字設定。最近、2000字に凝つとるライス35歳。

雷が鳴り響いた。

大岩信一郎は、寒さに震え、ペンを走らせた。布団を被り、机に向かつてゐる。一切が近いのである。信一郎は小説家だ。ギャグ小説を中心にして書いてゐる新人作家だ。

信一郎は急に担々麺が食べたくなつた。ラーメン屋に行きたいが金がない。そうだ。コンビニに担々麺のカップ麺が売つてたぞ。信一郎は、ジャンバーを着て傘をさし、雨の中を歩いた。

その時分、信一郎の妻、華子は、パインツップル市でダンスの練習をしていた。近々、市内で、ミュージカル「花復活」が公演される予定。華子はそれに出発するのだ。女やくざ麻呂子役である。

華子は、練習が終わり、コーヒーを喫茶店で飲んでいた。言わば、単身赴任である。信一郎にメールしたら、信一郎が、ひょうきんな写メを送信し、華子を励ました。

喫茶店の前では、酔っぱらいがげろげる吐いている。向かいが居酒屋。酔っぱらいはついにアスファルトに寝転んでしまつた。冬なので危険である。酔っぱらいは身体が力尽きてるゆえ、まさか自分が凍死する予定だとは気づいていない。悲しいことだ。これも不況の影響か、陰鬱な風景である。

信一郎は、頭を悩ませていた。文芸評論家の拓村元助が雑誌で、信一郎の新作をこき下ろしていたのだ。

元助は、才能ある作家に嫉妬するとすぐに攻撃する癖があつた。元助は、若い頃、小説家になりたかったが挫折したのだ。まあとはいっても本当の悩みはそんなことじやない。ちんかすなんか無視すればいい。

本当の悩みは、非正規雇用問題である。信一郎の親友、七村啓一が、十年以上アルバイトをしてゐるのだ。だから、結婚ができない。信一郎は啓一と一緒に、会社に団交に行つたこともあつた。しかし、

会社は無理ですを繰り返すばかり。信一郎は頭を抱えていた。

とはいって、それもそれほどの悩みではない。あくまで他人事である。まあ本当の本当の悩みについては、いざれ話すところ。今は話せない。勘弁してくれ。

信一郎のことを見つと、世の中を本当によくしたい。作者は本当にそう思う。非正規労働者は現在1700万人いる。1985年の段階だとわずかに600万人だった。今は三人に一人が非正規である。これはウソじゃない。現実だ。恐ろしいが現実だ。

日本を本当によくしたい。金持だけが幸せなんて間違つてると思つ。そんな世の中はよくなつ。いけない、許されないことだ。

信一郎は、飛び降り自殺をしたかった。あまりに仕事がつらい。しんどい。

テレビコマーシャルでやつてた原由子の歌がすぐよかつたと信一郎は思つた。癒されると思つた。

また生きようじと。

そういうことの繰り返しだ。

人生とこゝのはそつうこゝものだらう。山あり谷ありだ。

信一郎は、ちょっと悪いことをしてしまつた。華子が留守なのをいいことに、店で松坂牛のサーロインステーキを食べてしまつたのである。「ああ。オレって最低な旦那だ。悲しい……」

しかし、とろけるような肉は本当に旨かつた。また明日もがんばろうといつ気分になつた。

しかし、悪いことというのは本当にやつてはいけない。なんと、その日、華子の所属する劇団から電話があつた。「ええええええ。華子がトラックにはねられた??」

信一郎は、やばい早く病院に行かなくちゃ、と焦つたが、編集者が腕をつかむ。「離してくれよ。妻がやばいんだよ」「先生。止めはしません。大切に間に合えばいいのです。ノーパソを持つていてください。そして、編集部に送信してください。まあ。行きなさい」「う、うん。わかった

信一郎は、新幹線に飛び乗った。

「ああ。華子。絶対無事でいろよ。これからダンサーとして活躍しないやいけないのに、死んだら終わりだよ」

信一郎は、手を組んで神に祈った。

雷が鳴り響いた。

テレビでバーガーのことがやっていた。おしゃれなバーガー・シヨップの全品から売上ベスト10をノーミスで当てると百万円、全部当てるまで帰られない食いつづけるという、そういう番組だ。百年後の読者に説明するとね。今の読者は知ってると思うが。とにかく、眞そう。よだれが出る信一郎。

手術室の前のソファで、信一郎は、ケータイでそれを観ていた。
「ああ。バーガー眞そうだし、華子が心配だし、なんか複雑だな。やばいぞ。へンな汗出てきた」

なんということだらう。バーグの魅惑。華子の容態。

複雑なオーラを信一郎は出し始めた。危機とグルメが融合してきたのだ。

「ううう。華子。うひひひ。バーガー」

思うに……犬というのはある意味ラクな立場ではないか。芸人、サバンナの高橋は、自分でバーガーが選べなかつた。俳優の生田がspam・バーガーかなと言つたら、それを選んだ。一見、情けない感じもするが、外れたとしても、責任逃れできる。とはいへ、犬にならなければ責任を負わないといけないとはいえ、ある種、自分勝手にできるから、それもラクだろ。葛藤創造法がやはり一番難しい。しかし一番面白い。

「うーん。うーん」

雷が鳴り響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1617z/>

何と言う。何を言う。

2011年12月5日20時53分発行